カトリック仙台教区報

2006年9月3日　No.171

発行
カトリック仙台司教区
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任　広報委員会
URL； http://sendai.catholic.jp/

平和への願いを行動で・・・
全小教区で「平和を求めるミサ」

日本カトリック平和旬間の8月13日、仙台教区の全小教区で「平和を求めるミサ」がささげられた。

この日のミサ式文は、教区の人権を考える委員会に制作が委ねられていた。同委員会は、『仙台中央地区お知らせ』で制作スタッフを募集し、これに応えて参加した人々と共に「平和を求めるミサ」を準備していった。こうして作られた式文は、各小教区に送られ、それぞれの小教区に印刷配布、このミサに心を整えていった。

仙台中央地区では、午前10時から6教会の合同典礼として、信徒約400人が参加し、平賀徹夫司教の主司式で、5人の司祭と共に「平和を求めるミサ」が共同司式でささげられた=写真=。典礼奉仕には、6教会の信徒が協力して奉仕に積極的に参加しており、各小教区で練習を重ねていた聖歌も、非常に美しく聖堂に響いた。

ミサの中で、平賀徹夫司教は次のように呼びかけた。

1981年、教皇ヨハネ・パウロ2世が来日し、東京、広島、長崎を訪れました。特に、広島では、世界に向けて「広島平和アピール」を発表されました。

「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死そのものです」で始まるあの有名なメッセージです。

これを受けて、日本司教団は、1982年、8月6日から終戦記念日の8月15日までを「日本カトリック平和旬間」と定めました。

私達信者は、平和の子らと呼ばれたのであり、平和のために働くように求められています。その平和を求める意志を行動で表すことです。

キリストこそ私達の平和のもとです。平和のために働くためにはキリストと結ばれている必要があります。

「友のためにいのちを与えるほど大きな愛はない」（ヨハネ15・13）と教えられたキリストの愛は、最後の晩餐の記念として私達に残してくださいました。ミサを通してキリストの愛に結ばれて、平和のために働く力と喜びを得て、平和のために働くものとなりましょう。

塩と光

▼イエスはペトロに向かって、「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てる」（マタイ16・18）と、宣言なさいました。

さらに、教会は「キリストの体であり、その頭（かしら）は、キリストご自身です」（エフェソ4・12-15参照）。第二バチカン公会議は、聖書に基づいて教会を「神の民」と表現しました（『教会憲章』第二章参照）▼教会はキリストの祭司職、預言職、王職にあずかることができるのです。「あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です」（ペトロ一2・9）。まず、この祭司職を忠実に生きるために、典礼活動を充実させることが第一の課題です。さらに、信徒の祭司職は、自分の仕事、家庭生活、日々の労苦、そして世そのものを天の御父にささげることです（『教会憲章』11項参照）。▼預言職を生きるために、世の終わりまでわたしたちと共におられる主に協力して全世界の人々に、福音を宣べ伝えます（マルコ16・15参照）。▼また、王職を実践するために、すべての兄弟、特にイエスの兄弟である貧しい人々に愛と正義をもって仕えます。（博）

多国籍の人々と共に生きるため
第34回カトリック宮城県大会開かれる

大雨の降る7月2日、仙台白百合学園中学・高等学校のロザリオのマリア聖堂で、第34回「カトリック宮城県大会」が開催され、約400人の信徒が参加した。

今回のテーマは、「共に生きる――豊かな交わりをめざして」。特に、外国籍信徒の増加が予想される現在、自教区を「多国籍教会」ととらえ、その歩みを続けているさいたま教区の「オープンハウス」スタッフを迎え、その取り組みの紹介と、協働宣教司牧の現状についての報告とミサを中心に午前10時から午後3時まで共に学び、祈り合った。

宮城県信徒連絡協議会会長・佐々木由美氏の開会挨拶の後、「オープンハウススタッフ」のSr.小塚恵子（援助修道会）とフィリピン人信徒宣教者のネディ・コドクさんが、「さいたま教区での多国籍教会の歩みについて」と題して、大スクリーンにこれまでの歩みなどを文字や図式を映し出しながら対話形式で以下のように説明した。

さいたま教区には、日本人信徒の約6倍の外国籍信徒がいる。国籍としては、ブラジル、フィリピン、ペルー、ベトナムなどから来ている人々である。

オープンハウスは、1994年、コドクさんが来日し、教区を形成している4県の中心である小山市に開設された。当初はハウスの存在を知らせる活動をしていたが、その存在が知られるようになると、人権の問題に関わらざるを得なくなった。1年間で約200ケースを取り扱ったこともある。

1995年に、教会が力を入れたことは、ボランティア養成である。

さいたま教区事務局長　Sr.小塚さん　　コドクさん

1996年、教区は「多国籍教会」ということを打ち出した。それは、「日本人も、他国籍の人も同じ寄留の民である」との考えからで、これを機にオープンハウスは、言語別司牧活動に重点を移した。

1997年、オープンハウスを小山市から、教区事務所内に移転させたことで、同ハウスの活動が司祭たちの目に留まるようになり、司祭たちの間から「オープンハウスとは何か」という疑問が出されるようになった。

これをきっかけにして、年一度の司祭大会に参加し、現状を伝えることができるようになった。

2002年から、リーダー養成に力を入れている。特に、人権と司牧の問題について養成した。スタッフにできること、できないことをはっきりさせた。お金はない、弁護士もいない。話を聞き、できることをしていこうとした。

現在は、外国籍の子どもたちへの信仰教育を大切にしており、言語別にミサ式次第から始まって、初聖体、堅信についてのテキストも作成している。

私たちは、ストレスの多い仕事の中で、お互いが支え合っている。大切なことは、日本人についても外国籍の人々についても、理解することである」。

第二講話は、さいたま教区事務局長である矢吹貞夫助祭から、「協働宣教司牧」について、概略以下のような話がなされた。

1999年、司祭大会で教区のビジョンが作成され、発表された。「すべての人々、特に小さくされた人々と共に福音を」というもの。これを実現に移すために、優先課題とその取り組みに具体的な8分野を策定し、歩み始めた。

この取り組みを実現していくためには、キリストにおける新しい生活を築いていかなければならないというところから、協働宣教司牧ということは必然的に出てきた結論といえる。

協働宣教司牧を打ち出したとき、谷大二司教はその前提として「協働宣教司牧は、小教区の統廃合を考えるのではない。必要な所には、小教区共同体を増やしていくことも視野に入れる」のだと説明した。↖

宣教司牧の基本方針策定にむけて

司教　マルチノ　平賀　徹夫

仙台教区では教区の宣教司牧のビジョンとして固まったものをまだ持っていません。これまで、教区宣教司牧を考える会で、「教区の５年後（将来）を見据えた宣教司牧のあり方」を検討してきました。そして、人的な面からも経済的な面からも、今までの形のままあり続けることはできないと共通に認識できましたが、具体的に何をどうしたらよいかまとめるまでにいたっておらず、検討はこれからも続きます。

これと平行して、詳しいことは略しますが、「仙台・塩釜地区（仙台圏）の教会はどうあったら良いかアイディアを提案してほしい」ということで、仙塩地区の信徒・司祭・修道者の中から教区顧問会で推薦された方々に「プロジェクトチーム」になっていただき、その労をお願いしていました。そして去る７月１９日、その大変な労作である答申が司教に提出されました。広範かつ詳細な資料も添付されていて、今後の教区、特に仙台圏を考える上で、大変に貴重な材料となるものです。

更にこれと平行する形ですが、７月１１日の司祭評議会において、「教区の宣教司牧の基本方針を論議するための具体案を提示する」ことを目的とする特別小委員会を立ち上げる、と決定しました。５人の司祭による構成、任期は１年間、と考えています。

教区としてこれから、司祭評議会が中心となって、上のプロジェクトチームの答申、そしてこの小委員会からの具体案を受け止め、教区宣教司牧評議会とも連携しながら、宣教司牧の基本方針について論議し、固めていくことになります。

三つのポイントがある。協働宣教司牧は、①すでに始まっている―ニーズが多様化し、対応の多様化が迫られている現在、司祭が一国一城の主であるという時代は終わった。信徒と司祭が相互に信頼し、視野を外に向け、教会が救いのしるしとならなければならない。②豊かな共同体をめざす―ミサを中心とする共同体であるが、その土台は共同体としての交わりであり、信仰生活である。この土台がしっかりしていなければ、宣教司牧はできない。そのために、上意下達の形ではなく、一人一人のタレント、違いを活かした隔ての壁を壊した協働が必要。

③面で取り組む―教区をブロックに分け、ブロック内の全体を見ながら宣教司牧のプログラムを作り、実践する。

以上のようなことを行っているが、私たちが実感しているのは、一緒に皆でやっていくとき、聖霊が働くということである」。

昼食時には、中世教会音楽の合唱があり、参加者を喜ばせた。

1時半からは、平賀徹夫司教の主司式で共同ミサがささげられた。スペイン語やタガログ語での聖書朗読や、多言語での共同祈願などがあり、多国籍教会として生きようとする仙台教区の姿勢が見られた。

司教座聖堂70周年を祝う

元寺小路教会の保護の聖人である聖ペトロ聖パウロ使徒の祭日と仙台教区司教座教会献堂記念日のミサとお祝い会が、6月25日元寺小路教会で行われた。本来の祭日は6月29日だが、ミサは祭日の典礼に変更して平賀司教が司式された。

平賀司教は説教の中で、次のように話された。

「ペトロとパウロは教会の中心となった使徒です。教会の歴史は殉教が大きな種になっています。教会を最初に建ててくださった方ご自身が、いわば最初の殉教者です。ご自分の命を人類の救いのためにすべて投げ出してくださった、それほどまでに私たちを大事に思ってくださいました。私たちも毎日殉教の精神を持って生きていくようにしましょう。」

ミサの後、仙台教区の司教座聖堂70周年のお祝いをおこなった。

1936年6月29日に函館から仙台に司教座が移され、仙台教区が誕生して今年で70年になる。お祝い会の中では、仙台教区と元寺小路教会の歴史を振返りながら、1936年の初代ルミュー司教の叙階式=写真下2枚=や戦前戦後の大聖堂の写真をスクリーンに映して、仙台教区の信仰の歴史を思い起こし、宣教への思いを新たにした。

（今田潔）

戦前の大聖堂　１９３６年頃

典礼の霊性を深める⑮

司教神学顧問　佐々木　博

「感謝と賛美」

感謝とは、神の賜物で満たされ、キリストにおいて完全に与えられる神の恵みに対する人間の応答です。

賛美も、恵みの源である神とそのわざをほめたたえることです。ですから、感謝も賛美も神の偉大さをたたえ、神に栄光を帰すことなので、一体となる行為です。「優れた会衆の中であなたに感謝をささげ　偉大な民の中であなたを賛美できますように」（詩編35・18）。

教会は、聖書全体を反映している詩編を、キリストの福音とその生涯の光をあてて理解し、典礼に用いて来ました。そもそも詩編は、イスラエルの最も古い時代からささげられて来た神への賛美と感謝の祈りであります。そして、この賛美こそが、神の民イスラエルの礼拝の特徴となりました。つまり、神の救いのみわざに感動したとき、神への賛美となったのであります。

新約における典礼の中心であるミサは、過越祭の伝統の上に制定された「感謝の祭儀」であります。ですから、初代教会では、ミサのことをギリシャ語で感謝を表す「エウカリスチア」と呼んでいました。これは今日でも、ミサの全世界共通の呼び名となっております。このように、感謝と賛美こそが典礼の霊性の土台といえましょう。ですから、典礼の主体である信仰共同体は、いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝するよう励みます（テサロニケ一5・16-18参照）。また、日々の生活のただ中でも神に感謝し賛美します。

憲法9条を変えると世界はどうなる？

―安全保障のジレンマと憲法改正論議―

マイケル・シーゲル神父講演会

カトリック正義と平和仙台協議会主催で、7月15日（土）元寺小路教会で開催された講演会には55名が参加した=写真=。

シーゲル神父は講演で、「安全保障のジレンマ」の概念を第一次世界大戦の例から説明し、各国が互いに脅威を感じながら、その解決を軍事力即ち力で解決しようとするとき戦争が始まるというセオリーを明快に指摘された。

日本は第二次世界大戦の教訓から日本国憲法を制定して、第9条による戦争防止の歯止めを設けたが、その後、自衛隊の軍事力は世界第3位の規模に拡大している。この安全保障を軍事力に求めようとする時、アジア各国にとって脅威となるが、憲法9条があることで、アジアからまだ戦争をしない国として認識されている。

憲法改正をして日米軍事同盟・日米安保にのみ日本の安全保障を求める時、米国の自国優先政策の罠にはまり、道連れとなって、最後には見捨てられるのが歴史上見えてくるとの理論展開は、日米安保にのみ力を注いでいる近年の外交政策に警鐘を鳴らし、憲法9条の重みを実感させられるもので、参加者は深い感銘を受けた。

（仙台正平協・氏家昭）

【講師】マイケル・シーゲル神父（神言会）
南山大学総合政策学部助教授
（キリスト教社会倫理・神学博士）
著書・「憲法第九条に関する一考察」他

澤田和夫師による新世界一黙想会

2006年5月3日～5日、青野木・ドミニコの家で、東京教区高円寺教会司祭の澤田和夫師=写真=を講師にお招きし、「聖書で祈る―マルコ福音書を中心にして―」をテーマに黙想会が開かれました。

「新世界」は30年ほど前から、毎年、神学者の澤田神父さまを囲んで黙想会を続けております。

今年は仙台市内だけではなく、遠くは神戸、名古屋、東京そして山形からの参加者もあり、20人を超える方々が、「マルコ福音書」を澤田神父さまとともに通読しました。

「信仰とは信じるまごころ」「・・・を信じるとは、・・・に心を向けること」「許すとは英語で forgive というが、for は豊かに、give は与えるの意、すなわち豊かに与えるということ。ただ単に許すという意味ではない。」「聖書を開くとき、キリストから自分たちに宛てられた手紙のつもりで読むこと。そしてこれにどう答えたらよいのかを考えること。そのようにすれば、実のある読み方ができる」など、余分なことは何もおっしゃらない淡々とした語り口の中で、たくさんのことに目を開かせてくださいました。

また、詩編も繰り返し読み、参加者が心に響いた箇所をそれぞれに述べ合い、詩編を身近なものとするようにお導きいただきました。静かな祈りの中で、聖霊に満たされた3日間でした。そして、福音宣教への大きな力をいただくことができました。

（後藤敕）

招きにこたえて ⑧

神様の愛に生かされて

Sr.村松由美子

神の愛こそ、無償の行動的な愛の土台であり、励みである（教皇ヨハネ・パウロ2世・使徒的勧告-奉献生活から）。

今思えばということになるのですが、多くの人々との出会いや関わりの中で、神様が働いておられ、召命にまで導いて下さったのではないかと思うのです。洗礼のお恵みを頂いて間もない頃だったでしょうか、自分以外の人々のために生きているような方々が、確かにいらして、特別に感動した訳でもないのですが、なぜか気になって仕方がなかったことを覚えています。神様の愛に活かされてはじめてなし得る生き方がこれなのだろうと、素直に納得できたのも、その頃の私にとっては不思議でした。人間は、学び合って、助け合って生きていくものと思いながらも、苦しかったり、悲しかったり、妙に力が入って頑張ってみたりしていた私の「つっぱり」が挫かれたのかもしれません。

これが、私の一生の「折り返し点」となったようです。神様は、その時々に、必要なものを与えてくださるという真実を実感いたします。そして、その時、選び取る恵みも必ず与えてくださるのですね。

（殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会）

祝　グアダルペ宣教会　日本宣教 50 周年

グアダルペ宣教会が日本での宣教を始めて50年になることを祝う記念ミサが8月11日（金）、会津若松ザベリオ学園講堂で行われた。

ミサは、平賀徹夫司教主司式により、同宣教会司祭や仙台教区司祭など17名による共同司式でささげられた＝写真＝。

平賀司教は、説教で、「あなたは、自分の小教区にどんな夢を持っていますか。自分の属する小教区がどんな小教区であったらよいかを考え、その実現のために自分は何をしたらよいかを考えて下さい。

50年前、夢とエネルギーを持って宣教のために来られた宣教師の方々によって、小教区は活気に満ちていたことでしょう。

今、私たちの教会はどうなっているのでしょう。

教会は司祭の教会ではなく、信者全員のものです。

教会は旅する神の民。『あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。・・・わたしは世の終りまで、いつもあなた方とともにいる。』（マタイ28・19-20参照）とおっしゃったイエスのことばに信頼を持って応えていくためにこの50周年を祝いましょう。」と話された。

共同祈願では、会津地区の各教会代表者らが、宣教会司祭の活動に対して感謝の祈りをささげた。

祝賀会では、グアダルペ宣教会総長ホアン・ホセ・ルナ師＝写真下＝が、宣教師たちを温かく迎えてくれた仙台教区と信徒たちに感謝の言葉を述べ、日本管区長ホセ・モンロイ師は、「50年の経験を生かして、新しい50年をはじめます。皆様のお祈りをお願いします。」と力強く挨拶した。

その後、同宣教会の50年の歴史がスライドで紹介されると、なつかしい神父様方の写真に会場から拍手がわきあがった。

グアダルペ宣教会は、外国への宣教を目的に、１９４９年に、メキシコカトリック司教団によって創立され、メキシコの信徒たちの支援に支えられている。１９５６年(昭和31年)8月16日、最初の3人の宣教師が来日し、小林有方司教の招聘に応じて１９５８年(昭和33年)福島県会津地区で宣教を始めた。

その後１９８４年（昭和59年)からは京都教区、２０００年(平成12年)からは、東京大司教区でそれぞれ会員の司祭が福音宣教にたずさわっている。

来日50周年記念行事は、仙台教区以外に、8月5日に東京カテドラル、9月8日には、京都教区伏見教会でも行われる。

グアダルペの聖母マリア

（グアダルペ宣教会の守護者）

メキシコという国は、まるで万華鏡のように、文化も言語も異なるいろいろな民族が集まった国である。それを一つにまとめているのがグアダルペの聖母マリアである。

豊かな人の家にも、貧しい人の家にも、学問のある人の家、無学な人の家、どの家に行ってもグアダルペの聖母マリアの像が飾られている。

グアダルペの聖母マリアは、１５３１年、先住民のような顔で、原住民の話すことばで話しながら、ホアン・ディエゴという名の貧しいインディオの前に現れた。そして、征服され、苦しみを味わっている民に希望を与えるメッセージを伝えた。彼を司教のところに遣わし、彼女の愛を示すために聖堂を建てるよう伝えさせた。

スペイン人の司教はインディオのことばを信用せず、証拠を示すように求めた。聖母は、ディエゴに数本のバラの花を渡し、彼はそれをサボテンの繊維で出来た粗末なマントにくるんで司教のところに持っていった。彼がこの花を司教に見せようとした時、花を包んだマントに、聖母の姿が鮮やかに描かれていた。

司教は、ディエゴのことばが本当であることを悟り、聖堂を建てた。

聖母の姿が描かれたマントは、473年たった現在でも、メキシコ・シティの聖堂の中に、現れた時と同じ場所に、そのときのままの形で見ることができる。

メキシコの司教団は、この外国宣教会の設立にあたり、グアダルペの聖母マリアをその保護者とたのみ、グアダルペ宣教会と名付けた。

（グアダルペ宣教会パンフレットより抜粋）

シュトルム神父遺作展

岩手県二戸市で開催

7月26日(水)～30日(日)、岩手県二戸市民文化会館展示室において、2年前に帰天されたベトレヘム外国宣教会のゲオルグ・シュトルム神父の遺作展が行われ、同神父を慕う教区内の信者と二戸市民の多くの人々が詰めかけた。

「G・シュトルム神父遺作展」と題するこの展覧会は、二戸市主催、ベトレヘム外国宣教会本部、岩手日報社ほかマスコミ2社と2団体が後援して開催された。

シュトルム神父は、生前、植樹や、木彫、絵画、作曲、またその出版活動などをとおして宣教活動をすることで、多くの人に知られていた。2004年7月、89歳で亡くなられたシュトルム神父の描いた絵画など遺作1762点を、同神父所属のベトレヘム外国宣教会本部が、二戸市に寄贈した。

今回、その遺作の整理保存作業が終わったことから、7月29日の命日を中心に、植物や風景の絵画など百点が厳選され、展覧会が開催されたもの。

シュトルム神父は、1959年以来その最期まで、カトリック二戸教会の主任司祭として、その宣教師としての生活を全うした。シュトルム神父をよく知る人々は、彼のことを「東北のフランシスコ」と呼ぶ。それは彼の清貧の生活と動植物を愛する心からである。特記すべきことは、彼の20年におよぶ植樹への取り組みであろう。教会の裏庭で、種から育てた苗木を、市の許可のもと、伐採後の山や市民の森、野球場周辺などに一人で一本一本植え続けた。その数は50種2000本におよぶ。

二戸市を愛し、古い民家をそのまま教会とし、当時の管区長が建物を建て替えようと言ったとき、「私が自分を家に合わせるので、このままで」と答えたように、二戸周辺の古い民家を愛し、水彩画に描いていった。神父の描いた多くの絵の中には、今は希少植物となった貴重な花や草が残されている。

「私の植樹は、未来の二戸市への贈り物です。私は育ち行く樹木を仰ぎながら、ここで小鳥や山の小動物が憩い、二戸の野球少年たちが木の下で涼んでいる姿を想像するのが実に楽しい。」という言葉を神父は残している。

かやぶきのある風景

シュトルム神父の遺作展であるが、これは、岩手県を宣教司牧してきたベトレヘム会の宣教師一人一人の働き、奉仕を表すものでもある。

（Sr.米竹佳子）

修道誓願記念日を迎えて

コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会

Sr.斎藤トミ子とSr.尾形キミは、コングレガシオン・ド・ノートルダムの戦中を生き抜いた、日本人会員第1号。

Sr.斎藤は語る。「10歳で受洗した私は、プレゼントにもらったリジューの聖テレジアの本から、どうしても聖人になりたいと思い、修道生活を熱望しました。家から離れるために、八戸教会で働いていた時に出会ったのが、ノートルダムでした。これが、私にとっての、神様の導きだったわけです。神様の導きは、本当に不思議ですが、確かです。今もって、自分の歩みはカメさんのようだと感じますが、『それ、がんばれ、がんばれ』と旗を持って待っていてくださるイエス様に、早く喜んでいただけるよう、どうぞ引き続きお祈りください。

Sr.尾形は、「戦時中、カナダ人のシスターたちは敵国人として、会津若松に軟禁されていました。食糧事情が非常に悪く、私は彼らのために福島の実家から食べ物をもらって来ることがありました。ある日、卵をよく産む鶏を、母が一羽くれたので、箱に入れて汽車で持ち帰りました。途中、闇物資検査のため警官が乗り込んで来たとき、私の座席の下で、鶏がコッコッコと鳴くじゃありませんか。本当にヒヤヒヤしたものです。」

Sr.江川幸子は、桜の聖母学院小学校で教えている。「ダイヤモンド祝のシスターたちと比べると、銀祝はまるでヒヨコみたいかも知れませんが、今日までの道は、途中で健康を害したこともあり、必ずしも常に平坦ではありませんでした。でも、その凸凹のすべてが、神様の深いお計らいだったと、心から確信しています。」（Sr.今泉 ヒナ子）

（関連記事7ページ）

各地から

▼岩手　志家教会
志家教会創立50周年記念式典

1956年（昭和31年）7月1日に四ツ家教会から分かれ150名の所帯でスタートした志家教会は半世紀の歳月を経て、去る6月24日、教会創立50周年記念式典を行いました。記念ミサには県内兄弟教会の皆様や、東京など県外在住の当教会OB・OGもこられ聖堂最大収容人数に近い147名の信徒の方に参加をいただきました＝写真＝。

平賀司教様はじめ県内外の8名の司祭により厳かにミサが執り行われました。司教様の説教では、教皇様の回勅「神は愛」(25・a)より、「教会の本質はその三つの務めによって表されます。すなわち、神のことばを告げ知らせること（宣教）、秘蹟を祝うこと（典礼）、そして愛の奉仕を行うこと（奉仕）です。」（使徒行録2・42参照）この3つが絶対必要であると説かれ、改めて自分の信仰を省みられた方も多かったのではないかと思います。

147名の大合唱による聖歌が記念ミサの感動をさらにたかめてくれました。引き続き別会場で行われた祝賀会では、創立記念のために当教会信徒作曲の「祝典歌」のチェロ演奏に続き、司教様、ベトレヘム外国宣教会ツゲル地区長の祝辞、土井勝吾神父様の挨拶の後、和やかな雰囲気で始まりました。祝宴中、弦楽カルテットの演奏があり、会場内にはそば等の屋台も並び、国際色豊な当教会らしく南米コロンビヤの民族舞踊、飛び入りの土井神父様の「短縮版？さんさ時雨」や「大漁唄い込み」も飛び出したりで、大幅に時間を超過しお開きとなりました。

キリストの教えを広めるべく、50年間神と共に歩んでこられた歴代司祭、先輩信徒そして何よりも「神様のお恵み」に感謝し、今後志家共同体が100周年、150周年を迎えることが出来るよう歩んでまいりたいと思います。

（飯塚豊）

▼宮城　一本杉教会
福音宣教50周年記念

一本杉教会は、7月17日（月・海の日）に、福音宣教50周年の記念行事を行った。

これは、1956年7月に、当時の仙台教区長小林有方司教の要請を受けて、一本杉の地に新たな小教区を創設するため、ケベック外国宣教会から、ジャン・ルイ・フォーレ神父が派遣され、当時開校されたばかりの聖ウルスラ学院中高等学校の一室を借り、ミサをささげ、福音宣教を開始したことを起源としている。

当日10時から行われた記念ミサは、平賀徹夫司教による主司式で、13名の司祭が共同司式に加わった。当教会の信徒に加えて、かつて当教会に所属していた方々、仙台教区内からお祝に参加された方々など200余名が聖堂を埋め尽くした。

続いて行われた祝賀会では、カナダから駆けつけた初代主任司祭フォーレ神父と、第6代目の主任司祭ジャン・シャールロワゼール神父、当教会で受洗しフォーレ神父と共に福音宣教に活躍していた土井勝吾神父などを囲んで思い出話に花を咲かせ、余興に「青葉城恋歌」が飛び出すなど和やかな時を過ごした＝写真＝。

祝賀会で歌う侍者会のメンバー

50年祭を行うにあたり、2年前から準備委員会を立ち上げて計画を練ったが、ただ一過性のお祭りに終わらないようにと4つの目標を定め、共同体のメンバーが一人一役、全員参加で取り組むことにした。4つの目標は【①信徒としての霊性を高める②教会共同体の一致を深める③福音宣教の拠点となる教会共同体づくりを目指す④仙台中央地区他教会との連携を深める】である。

一本杉教会の記念誌に寄せられた原稿を読むと、歴史の中で、初期の信徒の方々が、主任司祭を中心に福音宣教にいかに熱心に取り組んでいたかがよくわかる。歴史に学び、新たな一歩を踏み出すことが今の私達の課題である。4つの目標を、今後も私達の教会の目標として努力していきたい。

（岩井誠）

▼福島　CND修道会
修道誓願記念日

福島市のコングレガシオン・ド・ノートルダム修道院は、去る6月24日、3名のシスターの修道誓願宣立記念日を祝った。この日の喜びに輝いたのは、シスター・アンナ斎藤トミ子（誓願60年、気仙沼出身）、シスター・アンジェリーヌ尾形キミ（60年、福島松木町出身）、シスター・マリア・セシリア江川幸子（25年、福島松木町出身）。福島市花園町の同会修道院で、当日午後1時半から捧げられたミサは、梅津明生神父、チェスワフ・フォリシュ神父、イェジ・ウィドムスキー神父による司式で、100名を超える親族・友人で賑わった。

活動紹介

「ともにカダル集い」

この集いは、3年前に小教区の活性化と次代を担う若い信徒の交流を目的に、また、信者でなくとも聖書に興味を持っている方々をも対象に、「ともに聖書を読む集い」として一泊二日の日程で始まりました。

聖ゲオルギオのフランシスコ修道会と聖母被昇天修道会の共催で、第1回は溝部司教を指導司祭に迎えて開催されました。途中から名称を「ともにカダル集い」に改め、年4回のペースで開催され、今年の7月で11回目を迎えました。「カダル」とは津軽弁で「語る」の訛ですが、仲間に入るという意味もあります。

参加人数は、このところ10人前後ですが、八戸や弘前からの参加者もあり毎回新しい出会いと発見があります。

日ごろ遠ざかりがちな聖書にじっくりと触れ、ともに分かち合い、語り、神父様を囲んでいろいろなお話も聞くことができ、充実した時間を過ごすことができます。シスター手作りのおやつも魅力です。

（青森本町教会・張間成就）

私の気分転換

原町教会　若原裕代

1ヶ月ほど前から、明け方、激しいしびれを右手に感じて、その痛さに目覚めてしまうことが毎日続いた。頚椎異常かな？と整体に行ってみたが治らず、整形外科にかかったら「手根管症候群」といって、手を使い過ぎることによって手首の神経が圧迫され、しびれむくみなどの症状が起きるのだと言われた。ひどくなると手術も必要らしい。手の使い過ぎ・・・普通の主婦の私が手を使うといえば趣味・・・、テニス、手芸、パソコン・・・どの趣味も楽しく大好き、これが私の気分転換と思っていた。しびれの治療に毎夜簡易ギブスをつけて寝るのだが、この仰々しい自分の手を眺めながら、これって「気分転換」のやり過ぎってことかなあ・・・、と笑ってしまう。まるで気分転換の合間に日常生活をしているみたいだ。それでも止めようとしないのは、私にとってこれらの気分転換が、いかにストレス発散になって私を生き返らせてくれているか、分かっているからだろう。

修道院紹介

聖ウルスラ修道会一本杉修道院

世界で最も早く女子教育を目的として創立された聖ウルスラ修道会は、カナダを経て1936年に来日しました。戦争の混乱の時期を経て、1950年に小学校が木ノ下に創立され、以後、教育使徒職として仙台と八戸に根を下ろしてきました。

一本杉修道院は本部として、東京、仙台、八戸、のそれぞれの修道院同志の交流と結び役を果たしています。

現在のメンバーは23名で、二つのグループに分かれています。本部所属は17名ですが、4階には、療養や介護を必要とする姉妹のためのコミノテがあり、6名が所属しています。

学校に勤めている3名のほかは、宗教の勉強に来る方や、いろいろの相談にお見えになる方々に応じたり、院内の細かい仕事、カナダ本部ほか、その他の国々（台湾、タイ、インドネシア、フィリピン、ローマ）のウルスラ会との連絡、交流などに働いています。

また、信徒の方12名ほどが、アソシエ(賛助会員)として聖ウルスラ修道会の霊性を分かち合ったり、奉仕活動に参加したりしています。（Sr.堀江茂子）

新刊案内

回勅『神は愛』

著者　教皇ベネディクト16世／訳者　カトリック中央協議会「司教協議会秘書室研究企画／発行　カトリック中央協議会／定価　800円＋税

教皇ベネディクト十六世が就任されたのは、2005年4月24日。この就任ミサの説教で、「私たちをあがなうのは、神の愛」と話されて以来、折あるごとに神の愛について触れられていたが、教皇就任後、初の回勅として、本書「神は愛」を今年の1月25日に発表された。

本書が日本語訳され、出版されたのは7月12日であるが、それ以前に平賀司教様は、仙塩地区婦人会「あけの星会」の総会において、本書の内容を紹介され、「ぜひ出版されたら読んでください」と推奨されたもの。

百ページにも満たない薄い本であるが、内容は濃く、「愛の神学」が展開されている。

本書は二部に分かれ、第一部は、神の愛と人間の愛の関係について、第二部は、愛の共同体としての教会が行う愛の実践について述べる。

教皇は、第一部において、「現代の肉体賛美は、まやかしにすぎ」ず、人間の身体を「単なる生物学の分野に」追いやるものだと鋭く指摘する。人間の愛「エロース」と信仰に基づく愛「アガペー」は、究極的には一つの現実であると述べる。

第二部は、教会の愛の奉仕、愛の実践は、秘跡の執行、みことばの告知と並ぶ、教会の基本的な活動であると述べ、歴史を踏まえながら、現代、私たちが、愛の実践にどのようにかかわるべきかを教えている。

結びで、教皇は愛の実践をした模範的な聖人として、ツールの聖マルチノをまず取り上げておられることを恥じながら付け加えておく。